●エッセイ

愛について

大原まり子

二十年も前のこと……高校の教室で、クラスメイトから借りた『トーマの心臓』を読みふけった。

夕陽の射し込む放課後の教室……その時間は、いまも心のどこかから取り出すことができる。それは想いに彩られた記憶の彼方で、まるで萩尾望都の描線によって現れ出た世界のように、美しく儚(はかな)く、至福の時となって結晶している。

『トーマの心臓』の解説を引き受けるなどという大役がやがて巡ってこようとは、夢の中にいるような不思議な気持ちだ。

愛とは時に暗愚なものではあるけれど、愛がなくては、作品に触れることもできない。

人は人に似せて芸術を生み出す。

芸術のような人の心に触れ合おうとして、トーマはユーリを愛した……。

人類という種の際立った特徴だと思われるが、生まれ落ちたばかりの赤ん坊は無力な生き物だ。赤ん坊が無事に育つには、〝愛〟という、まことにとらえどころのないものに頼るしかない。

わたしたちは他者の愛によって育まれ、ひとたび成長すれば乳幼児期に貪(むさぼ)ったような過

剰な愛は必要がなくなる。いやむしろ、過剰な愛は毒のように蝕んで成長のさまたげになってしまう。

愛は人と関わり合いたいという本能の欲求であり、すべての欲望がそうであるように諸刃の剣である。

はじめは絶対的に必要なのに、のちに猛毒に変わってしまうとは、まるで「かごめかごめ」の歌のように怖ろしいではないか。

出産を含む母性、そして、愛について――萩尾望都はずっと格闘しつづけてきたのだと思う。

たとえば本書においても、エーリクとその美しく奔放な母マリエは盲目的な愛によって結ばれているが、マリエの死、さらにエーリクのさまざまな体験そして成長によって、やっと別の形の愛へと――破壊的に作用しない愛情へと変容を遂げてゆく。

愛は死をはらむ。

冒頭、雪の降りしきる美しい朝、十三歳のトーマ・ヴェルナーは線路に身を投げる。トーマの放った愛の剣が心臓を貫いて、ページを繰るわたしたち読者までも、主人公ユーリもろとも一つの物語の中へ、投げ込まれてしまう。

ヨオロッパのギムナジウムの生活がどのようなものか当時も今もわたしは知らないのだけれど、のちに大学で寮生活をおくるようになった時、萩尾望都の描いた風景がそここに現れ、ヴェールのようにあたりを覆うのを感じたものだ。

朝に夕に聖堂に響く若い歌声、樹々の風に戯れるざわめき、丹精された小さなバラ園、学生たちの深夜におよぶおしゃべりや、薫り立つお茶の時間（ティータイム）、舎監の先輩へのほのかなあこがれ、そしてキャンパスのどこかにあると伝えられる秘密の小部屋……。

萩尾作品によってエロティックな回路ともいうべきものが開かれ、目の前に広がるあらゆる光景が瑞々（みずみず）しさをたたえながら、立ち現れてきたのだ。

トーマは、ユーリに、無償の贈り物をした。

その贈り物はエロティックな回路を開いた。

トーマの無償の贈り物――この世の肉体をまとうがゆえに、〝死〟という胸の張り裂けるような悲しみのつまった贈り物――は、精神の死に至る病いに深々と突き刺さる。

愛はエロスをはらみ、エロスは死をはらむ。

エロスは死をはらみ、エロスは再生させる。

トーマの死は、恨みでも怒りでもない、それはただ、無償の、愛する者へのプレゼントであった。

トーマには、救済を求める魂の叫び声が、長い長いあいだ聴こえていたにちがいない。耳を聾（ろう）するようなうめきが、絶望にみちた苦しみが。暗黒の地下に葬られそうになっている生命の息吹き、いのちそのものが踏みにじられる耐えがたい苦痛……。

誰もがいう、トーマは天使のような子だったと。

トーマとは、大地の精霊にじかに触れ合うような人間であったにちがいない。

生命力を打ち砕くすべての力に刃向かい、大地から受け取る無償の贈り物を、大地と同じように、あたりに分け与えずにはおられぬ人間であったにちがいない。その心性は、どれほど貪られようとも黙って慈しむ母性のひとつの相貌（かお）である。

ユーリがその中にトーマを見た、トーマにそっくりの少年エーリクもまた、生命の躍動に満ちているというまさにその点において、ユーリの憎悪の対象となる。

なぜ憎むかといえば、溶鉱炉のような生命のエネルギーが、いつか、なにかを、変えてしまうからだ。

変化をもたらす何物かは、とても怖ろしい。

それは時に破壊的であり、古いものを打ち砕き、殺してしまう。

それは、じわじわと侵入して建物を傾（かし）がせてしまう植物の根のようなものだ。あるいは、どこまでもどこまでも、うねりながら、津波のように伝わってゆく音楽のようなものだ。

そして音楽といえば——萩尾作品には、これもたくさん現れる光景であり、音がしないはずの紙の中にどれほどきらびやかな音楽が迸（ほとばし）り、それら美しい音楽が幾度となく世界を滅ぼし、また再生させたかを、わたしたちは知っている。

ひとたび『銀の三角』をめくれば、蛇に似た黒髪をターバンの奥に隠した少女の奏でる音楽が、夢となって現実を浸食してゆくのを見ることができるだろう。その夢はある世界を消滅させ、同時に世界を構築し直す力あるものだった。

あるいは『スター・レッド』の主人公レッド・星（セイ）。こともあろうに物語の途中で死んで

しまう真紅の目の美少女は、死をもって世界をつなぎとめるが、彼女の念動力が引き起こす破壊もまた、どこか音楽の波動に似ていなかったか。
ともあれ、トーマの放った波動に触れた人たちが、そのまま何も変わらずに生きつづけることは不可能だっただろう。
なぜなら、それは飢えた虎に生身を与えたという仏典の伝説の激しい輝きであり、人々が〝神〟とよぶものの、奇跡のような顕現(けんげん)だったのだから。
そして最後につけ加えておこう。
トーマがユーリに与えた無償の贈り物とは、萩尾望都がわたしたちにプレゼントしてくれた『トーマの心臓』という作品そのものでもある、と——。

大原まり子

作家。一九五九年大阪生まれ。聖心女子大学在学中の八〇年、第六回SFマガジン・コンテストで『一人で歩いていった猫』が佳作入選、デビュー。『ハイブリッド・チャイルド』『吸血鬼エフェメラ』(早川書房)など著作多数。『戦争を演じた神々たち』(アスペクト)で第十五回日本SF大賞受賞。